

げにぞ 此の舟唄の通りに。いかなりぬらむ 以下豊後介の心中。妻子はどうか。つかりし身助けになるやうな事を憎むあまりに妻子を追散して思ふなひどい事をすらすらと着いてから餘りにも軽率な自分行動を思ひ續けて。胡の地の文集縛戎人「涼源郷井不_レ得_レ見_レ胡地妻兒虛棄捐_レ」

ただ一所の 姫君一人の爲に。

浮べる波風に 舟に乗つてゐるのであるから、この詞によつて兵部の君が今の身の上を表現し、いかにしなし奉らむ 自分ながら工夫がつかなくて。

そのやどりま 玉鬘の落着場にとつておいて。

都の内といへども 九條は場末市女 女の行商人。

水鳥の陸に 水鳥が陸にあがつてまご_レしてゐるやうな落着かぬ心ちして。徒然に定まつた爲事がないので退屈で、今まで経験しなかつた類に觸れて縁故を求めて。河内本「ないにふれて」は誤寫故校せず。

母おとど 河内本「おばおとど」がよい。乳母の事。この身はいと安く 私的事は氣楽なものです。問題は無いだらう。何とも言はれないだらう。わが君 玉鬘をあんな監如きの手にほつておいてはどんな氣持がしよう。

げにぞ 皆うち捨ててける。いかななりぬらむ、はかしく身の助けと思ふ郎等どもは、皆ゐて來にけり、我をあしと思ひて追ひ惑はして、いかがしなすらむ、と思ふに、心をさなくも顧み、せで出でにけるかな、と、すこし心のどまりてぞあさましき事を、思ひつづくるに、心弱くうち泣かれぬ。胡の地の妻兒をば空しく捨てくつとす。兵部の君聞きて、げにあやしのわざや、年頃從ひ來つる人の心にも、俄にたがひて逃げいでにしを、いかに思ふらむ、とさましく思ひつづける。歸るかたとても、その所といきつくべき古里もなし、知れる人といひよるべき頼もしき人も覺えず、ただ、一所の御ためにより、ここの年月住み馴れつる世界を離れて、浮べる波風にただよひて、思ひめぐらすかたなし。この人をも、いかにしなし奉らむとするぞ、とあきれて覺ゆれど、いかがはせむ、とて急ぎ入りぬ。

九條に、昔知れりける人の残りたりけるをとぶらひ出でて、そのやどりをしめおきて、都の内といへども、はかしくしき人の住みたるわたりにもあらず、あやしき市女商人の中にて、いふせく世の中を思ひつつ、秋にもなりゆくままに、さし方行く先、悲しき事多かり。豊後の介といふ頼もし人も、ただ水鳥の陸に惑へる心地して、徒然に、ならばぬ有様のたづきなきを思ふに、歸らむにもはしたなく、心をさなく出で立ちにけるを思ふに、從ひ來たりし者どもも、類に觸れて逃げ去り、もとの國に歸り散りぬ。住みつくべきやうもなきを、母、おとどあけくれ歎きいとほしがれば、何か。この身はいと安く侍り。一人の御身にかへ奉りて、いづちもいづちもまかり失せなむに咎あるまじ。われらいみじき勢になりても、わが君をさる者の中にはふらかし奉りては、何心地かせまし」と語らひ慰めて、神佛こそは、

八幡 山城石清水八幡宮。

かくなむ 御靈験によつて斯く上落が出来ましたと早く神にお禮を申し上げなさい。

五師 弄花抄「八幡宮の五師五人ばかり有歟」一禪一五師は只法師のつかさず也。五人事不造八幡宮に限らず諸寺に有也。河海抄「貞観八年別當安崇之時、以二運如法師、始補五師云々」唐土にだに河海抄「大唐高僧太宗皇后馬頭夫人(文宗孫玄成太子)形の醜き事を歎き給けるに、日本國長谷寺觀音に祈請し給へるに、夢の方より来て、手をの雲に乘りて、瓶水を面にそぐと見ゆるに、瓶水を面にそぐと見ゆるに、容貌端正に成にけり。是に依りて、乾正三年丙申七月十八日侍女を引率して明州の津に出向ひ又吉備大臣入唐時、長谷寺觀音住吉明神に祈請して、野馬臺をよみけるに、靈驗ある由江談に見えたり。ましてわが國のうちこそ唐土にも評判になつてゐるので、から、ましてあなたは遠い筑紫んで居られたのだから、永年住

ありけむさまをだに 生前の様子なりとも。玉登は三歳の時に夕顔に死別したのであるから。

樽市 枕舟子「市は辰の市。樽市は大和にあまたある中に、長谷寺に詣づる人の、必ずそこにとまりければ、觀音の御縁あるにやと、心こなる也」巳の時 午前十時。

下なる者 下男。

壺裝束 市女笠を戴き、薄衣の褌を前腰に壺折つてさしはさんだ姿で、女子の外出の折の装束。おほみあかし 花鳥「李部王記云「延長八八作願文」遙祈長谷三奉三灯十萬灯云々」人やどし奉らむと、外の客を泊めようと思つてゐたのに、誰がいらつしやるのか。家の女共が、あやしき女どもの家の女共が、家主人に相談なしに玉登の一行を泊めた事を叱るのである。

り給はめ。近き程に、八幡の宮と申すは、彼處にても・まゐり祈り申し給ひし松浦、箱崎おなじ社なり。かの國を離れ給ふても、多くの願・・・立て申し給ひき。今都に歸りて、「かくなむ御しるしを得・・・てまかりのぼりたる」と早く申し給へ」とて、八幡にまうでさせ奉る。そのわたり知れる人にいひ尋ねて、(彼宮のし)五師とて、はやく親の語らひし大徳の残れるを呼び取りて、まうでさせ奉る。(八幡に)打次ぎては、佛の御なかには、初瀬なむ日の本のうちにはあらたなるし顯はし給ふと唐土にだに聞えあんなる。ましてわが國のうちこそ、遠き國の境とて、年經給ひつれば、わが君をばまして恵み・・・給ひてむ」とて、(立て)いだし・・・奉る。殊更にかちよりと定めたり。(徒歩)ならはぬ心地にいとわびしく苦しけれど、人のいふままに、物も覺えて歩み給ふ。(姫君心)いかなる罪深き身にて、斯かる世にさすらふらむ、わが親世になくなり給へりとも、我をあはれとおぼさ・・・ば、おは

すらむ所にさそひ給へ、もし世におはせば、御顔見せ給へ、と佛を念じつつ、ありけむ・さまをだに覺えねば、ただ親おはせましかばとばかりの悲しさを歎きわたり給へ・るに、かくさしあたりて、身のわりなき・・・ままに、取り返しいみじくおぼえつつ、からうじて樽市といふ所に、四日といふ巳の時ばかりに、生ける心地もせでいきつき給へり。

歩むともなく、とかくつくるひたれど、足の裏動かれず、わびしければ、せんかたなくて休み給ふ。この頼もし人なる介、弓矢・もちたる人二人、さては下なる者、童など三四人、女ばら・ある限り三人、壺裝束して、ひすましめくもの、古き下衆女二人ばかりとぞある。いとがすかに忍びたり。おほみあかしの事など、此處にてし加へなどする程に日暮れぬ。家主人の法師(來て)、「人やどし奉らむとするとおほみあかしの、心にかかして」とむづかるを、めざましく聞

げに人々來ぬ これが右近の一行である。

頭かきありく 同宿してくれるやうにと頼りに頼む。いとほいとほしけれど 玉臺の一行は法師に氣の毒には思ふが。

とに 外の間に身を隠したりして。残り部屋に片隅に寄つて泊つた。軟障 玉臺は暮などを隔てにして居られる。かいひそめて ひっそりして。

年月に添へて 右近は落着かぬ奉公が年月のたつにつれて似合はしくないやうになつてゆく我身を思ひ惱んで。かやすく 身輕な支度で出たが。

折敷 食器を載せる片木(へぎ)造りの角盆。隅切角のお膳である。手づから取りて 姫君にかしづ御臺 膳などが揃はないで。

わがなみの 自分等なみの人ではあるまいと右近が思つて。

いと若かりし程を 豊後介の若い時分を見たのだが。

三條 三條さん姫君がお呼びです。三條は玉臺の下女。

兵藤太 豊後介のものと名。

うちつけなりや 現金なものだ。聞えずこそ侍れ 意外な事だ、お人遣ひでせう。

く程に、げに人々來ぬ。これもかちよりなめり。よろしき女二人、下人どもぞ、男女かずおほかめる。馬四つ五つ牽かせて、いみじく忍びやつしたれど、清げなる男どもなどもあり。法師は、せめて此處にやどさまほしくして、頭かきありく。いとほしけれど、又宿りかへむもさまあしく煩はしければ、人々は奥に入り、とに隠しなどして、かたへは片つ方に寄りぬ。軟障など引き隔てておはします。このくる人も恥かしげもなし。いたうかいひそめて、かたみに心づかひしたり。さるはかの世と共に戀ひ泣く右近なりけり。年月に添へて、はしたなきまじらひのつきなくなりゆく身を思ひなやみて、この御寺になむたびくまうでける。例ならひにければ、かやすく構へたりけれど、かちより歩み堪へがたくて、寄り臥したるに、この豊後の介、隣の軟障のもとに寄り來て、參りものなるべし、折敷手づから取りて、これはお前に參らせ給へ。御臺など打合は

で、いと傍痛しや」といふを聞くに、わがなみの人にはあらじと思ひて、物のほさまよりのぞけば、この男の顔見し心地す。誰とは覺えず。いと若かりし程を見しに、ふと黒みてやつれたれば、多くの年経たる目には、ふとしも見分かぬなりけり。三條、ここに召す」と呼び寄する女を見れば、また見し人なり。故御方に、下人なれど、久しく仕まつり馴れて、かの宿の事、の隠れ給へりし御すみかまで在りしものなりけりと見なして、いみじく夢のやうなり。主とおぼしき人は、いとゆかしけれど、見ゆべくも構へず。思ひわびて、この女に問はむ、兵藤太といひし人もこれにこそあらめ、姫君のおはするにや、と思ひ寄るに、いと心もとなくて、この中隔てなる三條を呼ばすれど、食物に心を入れて、とみにもこぬ、いと憎しと覺ゆるもうちつけなりや。からうじて來て、三條、覺えずこそ侍れ。筑紫の國に二十年ばかり經にたる下種の身を、知らせ給ふべき京人よ。人

擻練 紅の練絹。

いとど覺えて。一層年とつたといふ感じがして。

この女 三條。

わかものにて 右近は三條を若女房として見馴れて居つた當時を思ひ出すと。

おとど 少貳の北方即ち玉臺の乳母。

若君 玉臺。

君 夕顔の事については、右近は夕顔がはかなく死んだことを思ふと、乳母や三條ががつかりして思ひをこぼさうかと思つて口に出すのも怖ろしくて言ひ出さない。

いとつらく 夕顔を連れ出して行方をくらましたのは右近であるから。

たがへにや侍らむ」とて寄り來たり。田舎びたる擻練に絹など着て、いといたうふとりにけり。わか齡もいとど覺えて恥かしけれど、右近なほ・さしのだけ。我をば見知りたりや」とて、顔をさし出でたり。この女・手を打ちて、三條「あがおもとにこそおはしましけれ。あな嬉しとも嬉し。いづくより参り給ひたるぞ。うへはおはしますや」と、いとおどろしく先づ泣く。わかものにて見馴れし世を思ひ出づるに、隔て來にける年月かぞへられて、いと・哀れなり。右近「まづ、おとどはおはすや。若君はいかがなり給ひにし。あてきと聞えしは」とて、君の御ことは、はかなき世を思ふに、あへなくもやいはむとて、かけむもゆゆしくていひ出でず。三條「皆おはします。姫君も大人になりておはします。まづおとどに斯くなむと聞えむ」とていりぬ。皆驚きて、「夢の心地もするかな。いとつらくいはむ方なく・思ひ聞ゆる人にたいめんしぬべき事よ」と

いひやるべき方なく 涙に咽んで。

老人 乳母。

打捨て奉り給へる 夕顔が此世に残してお置きになつた玉臺がおかしくもありおかしう私にしていらつしやるので、私にそれを冥途の障りともてあましてまだ目をつぶらずに居ります。その折 夕顔頓死の折。

三人 乳母と三條と右近。

急ぎ立ちて 玉臺の一行が。立ち別る 一室に寄合つて話にあつた右近等が別々の部屋に別れた。もろともにや 御一緒に如何ですか。

て、この隔てに寄り來たり。・屏風だつもの名残なく押しあけて、まづいひやるべき方なく泣きかはす。老人は、ただ、「わか君はいかがなり給ひにし。ここの年頃、夢にてもおはしますむ所を見むと、大願を立つれど、遙なる世界にて、風のおとにて、もえ聞き傳へ奉らぬを、いみじく悲しと思ふに、老いの身の残りともまりたるもいと心憂けれど、打捨て奉り給へる若君の、らうたくあはれにておはしますを、よみぢのほだしにもて煩ひ聞えてなむ瞬き侍る」といひつづぐれば、昔その折、いふかひなかりしこと・よりも、いらへむ方なく煩はしと思へども、右近いでや、聞えてもかひなし。御方ははやう亡せ給ひにき」といふままに、三人ながらむせかへり、いとむつかしくせきかねたり。日暮れぬと急ぎ立ちて、みあかしの事どもしたため出でていそがせば、なかくいと心あわただしくて立ち別る。右近もろとも

うへ紫上。河内本に「見え給ふ」とあるのに従ふべきである。
我に並び給へる 私と夫婦になられたのはあなたには過分です。源氏が紫上に戯れていふ詞。

頂を離れたる光 楞嚴經「世尊頂放二百寶無量光明」頂以外の光はない。飛びはなれた美人は斯かる御さまをこんな美しい方ですんでの事に筑紫三界に埋木にしてしまはうとしたのですよ。

斯かる御さまを こんな美しい方ですんでの事に筑紫三界に埋木にしてしまはうとしたのですよ。

男女の頼むべき 頼りにしてゐる男女の子供達にも別れて。

ゆきまじるたより 内大臣邸に出入りする機会もありませう。父おとど 玉璽の事が父内大臣に聞召され。

恥かしうおぼいて 玉璽が。

やんごとなき御妻どもおぼしきすなり紫上や明石上など。だから源氏の妻にはなれないの意。

高りしさま 河原院で夕顔が頼死した事情。

心のをさなかりける事は 私の阿呆といつたら。

少貳になり あなたの夫君が少貳になられた事はお名前でも知りました。少貳が暇乞に源氏の方に來られた時。

ふ。うへの御かたちは、なほ誰か。並び給はむとなむ見給ふ。殿もすぐれたりとおぼした。めるを、言に出でては、何かはかぞへのうちには聞え給はむ。『我に並び給へるこそ君はおほけなけれ』となむたはぶれ聞え給ふ。見奉るに、命延ぶる御有様どもを、又さるたぐひおはしましなむや、となむ思ひ侍るを、いづくか劣り給はむ。物は限りあるものなれば、すぐれ給へりとて、頂を離れたる光やおはする。只これをすぐれたりと聞ゆべきなめりかし』と、うちゑみて、見奉れば、老人も嬉しと思ふ。斯かる御さまを、ほと／＼あやしき所に沈め奉りぬべかりしに、あたらしく悲しうて、家籠をも捨て、男女の頼むべき子どもにも引き別れてなむ却りて知らぬ世の心地する京にまうでこし。あがもと、はやよきさまに導き聞え給へ。高き宮仕し給ふ人は、あつからゆきまじりたるたり。物し給ふらむ。父おとど。聞召され、かすまへられ給ふべ

きたばかり、おぼし構へよ』といふ。恥かしうおぼいて、うしろ向き給へり。身こそ數ならねど、殿もお前近く召し使はせ給へば、物の折ごとに、『いかにならせ給ひにけむ』と聞えいづるを、聞召しおきて、『われいかで尋ね聞えむと思ふを、聞きいで奉りたらば』となむ宣はする』といへば、どの君はめでたくおはしますとも、さるやんごとなき御妻どもおはしますなり。まづ誠の親とおはするおとどにを知らせ奉り給へ』などいふに、ありしさまなど語り出でて、夕顔の代りに玉璽をたく悲しき事になむおぼして、『かの御かはりに見奉らむ。子もすくなきがさう／＼しきに、わか子を尋ね出でたると人には知らせて』と、そのかみより宣ふなり。心のをさなかりける事は、よろづに物。つつましかりし程にて、を尋ねも聞えで過ぐしし程に、少貳になり給へるよしは、御名に。て知りなき。まかり申しに殿に参り給ひ。し日、ほの見奉りしかども、え聞えで

田舎人にて 玉登が田舎娘になつて居られたら。

見くださるるかた 高い所であつたから、参詣人を見おろすことが出来たのである。

二本の歌 初瀬にお参りしたお蔭で姫君にめぐりあふ事が出来ました。古今旋頭歌「初瀬川を留川のべに二もとある杉を經て又もあひ見む二本ある杉」
嬉しき瀬にも 六帖三「祈りつ頼みぞ渡る初瀬川嬉しき瀬に初瀬川の歌 以前の事は知りませんでした。今日あなたに逢つたので嬉し涙に身までも流れてしまひます。
かたちはいと斯く 右近が玉登を見ての心の中。

おとどを嬉しく 玉登を斯く立派に育てあげたのは乳母であるから。

筑紫を 玉登を見て筑紫を奥ゆかしい土地のやうに思ふが、今迄見た筑紫人は皆田舎臭いのかねて居る。

物いとあはれなる 物思ひがちな玉登一行の心々には。人なみく 玉登が人並の身になる事は出来まいと人々は沈みこんで居たのだが、右近の話の序に父大臣の有様や、腹々に生れた大した事も無い子供を立派に育て上げた事や、由を聞くと自分のやうな日蔭者も望みが有ると玉登は思はれるやうになつた。

右近が家は 湖月抄(師)五條と末に見えたり。

程遠からず 玉登の九條の家とはあまり遠くないので、相談するにも便宜が出来たやうに玉登の方の人々は思つた。

右近は大殿に 右近は下向後源氏の六條院に参つた。

やみにき。さりとも、玉登姫君をば、かのありし夕顔の五條に。とどめ。給へらむとぞ思ひし。あないみじや、田舎人にておはしまさましょ」など、打語らひつつ、日一日、昔物語念誦などしつづつ。

まゐりつどふ人の有様ども、見くださるるかたなり。前よりゆく水をば、初瀬川といふなりけり。右近、

「二本の杉の立ちどを尋ねずば布留川のべに君を見ましや嬉しき瀬にも」と聞ゆ。

初瀬川はやくの事は知らねども今日の逢瀬に身さへなかれぬと打泣きておはするさま、いと目やすし。かたちはいと斯く。めでたく清げながら、田舎びこちうおはせましかば、いかに玉の瑕ならまし、いであはれ、いかで斯く生ひ出で給ひけむ、とおとどを嬉しく思ふ。母君は只いと若やかにおほどかにて、やはくとぞたをやぎ給へりし、これはけだかく、

しゅじ、もてなしなど恥かしげに、よしめき給へり。筑紫を心にくく思ひなすに、皆見し人は里びにたるを、心得がたくなむ。暮るれば御堂にのぼりて、又の日も行ひ暮し給ふ。秋風谷より遙に吹きおぼりて、いと膚寒きに、物いとあはれなる心。どもにはよろづ思ひつづけられて、人なみくならむ事もありがたき事と思ひ沈みつるを、この人の物語のついでに、おとどの御有様、腹々の何ともあるまじき御子ども、皆物めかしなしたて給ふを聞けば、斯かる下草・頼もしくぞおぼしなりぬる。寺から歸る時にも、かたみに宿る所も問ひかはして、もし又追ひ惑はしたらむ時、と危く思ひけり。右近が家は、六條の院近きわたりなりければ、程遠からず、いひかはすもたづき出で來ぬる心地しける。

右近は大殿に参りぬ。このことを、かすめ聞ゆるついでもやとて急ぐなりけり。御門引き入るるより、けはひ殊に廣々として、

斯かる古人 右近の事。

尊き修行者 前に右近が「山路し侍りて云々」と言つたから源氏が斯う問はれるのである。

年頃はいつくにか 玉璽は今迄どこに居たか。

昔人も 昔の女房達も一部は其儘に居りましたから。

心知り給はぬ 事情を知らぬ紫上の前ではあまり話さぬが良し。

誰ばかりと 玉璽は誰位の美しさか。紫上とはどうか。

れごとを宣ひ、女房達の人の心を見給ふあまりに、斯かる古人女房達の人の心に興味を持つてゐられる餘りにをさへぞたはぶれ給ふ。源かの尋ね出でたりけむや、何さまの人ぞ。尊き修行者語らひてゐて來たるか」と問ひ給へば、右近あな見苦しや。これがたはぶれごとであるはかなく消え給ひにし夕顔の露の御ゆかりをなむ見給へつけたりし」と聞ゆ。玉璽の事げにあはれなりける事かな。年頃はいつくにか」と宣へば、右近ありのままには聞えにくくて、あ右近「あやしき山里になむ。昔人もかたへは變らで侍りければ、その世の物語しいで侍りて、當時の堪へがたく思ふ給へりし」など聞え居たり。出で「よし、心知り給はぬ御あたり」と隠し聞え給へば、紫上「あな煩はし。ねぶたきに、聞き入るべくもあらぬものを」とて、御袖して御耳をふたぎ給ひつ。源かたちなどは、かの昔の夕顔と劣らじや」など宣へば、右近必ずさしもいかでか物し給はむと思ひ給へりしを、こよなうこそ生ひまさりて見え給ひしか」と聞ゆれば、源をかしの事や。誰ばかりとか。

したりがほにこそ 右近が紫上と比較するやうな答へぶりだから「右近も得意に思つてゐるやうだ」と評したのである。
親めきて「安心だ」と言ふ口のきゝ方が我が子の事を言つて居られるやうだから。
かく聞きそめ 源氏が玉璽の事を耳にはさんでからは右近を一人だけ呼んで。

父おとどには 父大臣には何で知られる必要があらう。
數ならで その大勢の子供達の数の中に玉璽が今頃になつて物の數でもない(卑しい腹から生れた)身で仲間入をしようと却つて引取られぬがまし位に思ふ事も有らう。

いといたう 大切に育てよう。

おとどに 内大臣にお知らせするに、君の外には誰もお知らせする方はございませぬ。おいたづらに過ぎ物し 源氏に逢はれたかひもなく亡くなつてしまつたか夕顔の代りに。

覺ゆ。この君紫上と宣へば、紫上程には逆もいかでかさまでは」と聞ゆれば、源したりがほにこそ思ふべけれ。我に似たらばしも、うしろやすしかし」と、親めきてのたまふ。
かく聞きそめ給ひてのちは、右近を召し放ちつつ、玉璽をさらばかの人、このわたりに渡り奉らむ。年頃・物のついでごとに、玉璽を口惜しう惑はしつる事を思ひ出でつるに、いと嬉しく聞き出でながら、對面せず居るもの今までおぼつかなきも、かひなきことになむ。紫上父おとどには、内大臣何・か知られむ。内大臣には子供が澤山有るのにいとあまたもて騒がるめるに、數ならで、今はじめ・立ちまじりたらむが、右近の心なかくなる事こそあらめ。我は、子供が少くてさうくしきに、覺えぬ所より尋ねいだしたるともいはむかし。好色者どもの心をつくさするくさはひにて、いといたうもてなさむ」など語らひ給へば、右近の心かつくいと嬉しく思ひつつ、君の御心まかせにただ御心になむ。内大臣おとどに知らせ奉らむとも、夕顔の代りに誰かは傳へほのめかし。給はむ。いたづらに過ぎ物し給ひ。

いたうもかこちなすかな。ひと
く因縁をつけるもんだね。

いふかひなくて 折角逢つたか
ひもなく亡くなつてしまつて。

さて物し給はば 玉登を此處に
引取る事が出来れば。

かく聞ゆるぞ この句は次の歌
に續けて意味を取る。今は御存じな
くも後ならぬから聞いてお分り
になるだらう。あなたとは絶つ
事の出來ぬ縁がつながつては絶つ
のだから。三稜は菱。筋は菱。
「三島江」から「三稜」までは筋
即縁の枕詞。

御文自ら 右近は此の御文を携
へて自身玉登方に持参して源氏
の仰せの趣を傳へた。
御さうぞく 玉登の衣類や女房
等の衣類など色々有る。
御匣殿 裁縫所なども用意の
品々を取寄せて、色合や作り方
などを格別好いのを選択されたの
だから。

いかでか知らぬ人の 赤の他人
の源氏の處へ行くのはいやだと
言ひ張つて迷惑がつて居るけれ
ども。

おのづから とにかく源氏の處
に行つて身分が高まつて來れば
自然内大臣もあなたを見付け出
される事です。

まして誰もく まして親子で
いらつしやるのだから、父大臣
もあなたも御無事でさへいらつ
しやれば結局は逢へる事です。

しかはりにば、^(ひじ)ともかくも引き助けさせ給はむ事こそは罪
かるませ給はめ」と聞ゆ。^(ま)いたうもかこちなすかな」と、ほ
ほゑみながら、涙ぐみ給へり。^(ま)あはれにはかなかりける契り
となむ年頃思ひわたる。かくてつどへたる方々のなかに、^(ま)か
折の志ばかり思ひとどむる人。^(し)なかりしを、命長くて、わが
心。^(ま)長さをも見果つるたぐひ多かめるなかに、いふかひなくて
^(ま)と、^(ま)そこばかりを形見に見るは、口惜しくなむ思ひ忘るる時な
きに、さて物し給はば、いとこそ本意かなふ心地すべけれ」と
て、御消息たてまつり給ふ。^(ま)かの末摘花のいふかひなかりしを
おぼしいづれば、さやうに沈みて生ひいでたらむ人の有様うし
ろめたくて、まづ文の氣色。^(ま)ゆかしうおぼさるるなりけり。物
まめやかに、^(ま)あるべかしく書き給ひて、はしに、源文「かく聞ゆる
を、
知らずとも尋ねて知らむ三島江に生ふる三稜の筋は絶えじを」

となむありける。御文、自らまかでて、宣ふさまなど聞ゆ。御
さうぞく、人々の料などさまま。^(ま)あり。うへにも語らひ聞
え給へるなるべし。御匣殿などにも、設けのもの。^(ま)召集めて、
色合しざまなど、殊なるをとえらせ給へれば、田舎びたる目ど
もには、まして珍らしきまでなむ思ひける。さうじみは、只か
ごとばかりにても、誠の親の御けはひならばこそ嬉しからめ、
いかでか知らぬ人の御あたりには、^(ま)はまじらはむ、とおもむけ
て、苦しげにおぼしたれど、^(ま)あるべきさまを右近聞え知らせ、
人々も、「おのづから、さて。^(ま)おはしそめ」人だち給ひなば、^(ま)おとど
の君も尋ね。^(ま)聞え給ひなむ。親子の御契りは、絶えてやまぬ
ものなり。右近が、數にも侍らず、いかでか御覽じつけられむ
と思ふ給へしだに、佛神の御導き侍らざりけりや。^(ま)まして誰
もく平らかに。^(ま)おはしまさば」と、皆聞え慰む。人々「まづ御
返りを」と、せめて書かせ奉る。^(ま)いとこよなく田舎びたらむも

數ならぬの歌 數でない我身は
何の因縁で愛い世に斯く生れ落
ちた事せう。墨色もかすかに書
ほのかなり。よるぼはしけれど、あ
ては居るが。

住み給ふべき 源氏は玉壺の住
む居間を見立てなされるに。
けしよう 顯證。晴れがましく
もあり、人の出入りも多からう。

相住み 共同生活者(花散里)も
ひつこみがちな良い人だから。

ありし昔の世の 夕顔との關係
を紫上に語られた。

世にある人の こんな人が世間
にはあると聞かれもしないのに
話されるものではない。それを
こんな機会に打ちあけるのはあ
なたを特別に思つて居るからで
す。人の上にも 自分のこととは
もかくも他人のことでも澤山見
た例ですが、あまり愛さぬ仲で
も、女の一念の深い事を澤山見
たから。

おのづからさるまじきをも 自
然さう關係してはならないやう
な女と關係した事も度々ある中
で。

明石のなみには 明石上と同等
にはお取扱なさらなかつたでせ
う。北のおとどをば 紫上は明石上
をけしからぬ女として打解けら
れなかつた。又道理ぞかしと この姫君の母
故源氏が愛されるのも尤だと考
へ直しもなされる。聞き給ふが 心おく理由を。

のを、と・恥かしくおぼいたり。唐の紙のいとからばしき、と
り出でて書かせ奉る。

數ならぬ三稜や何の筋なればうきにしもかく根をとどめけむ
とのみほのかなり。手ははかなだちて、よるぼはしけれど、あ
てはかにて口惜しからねば、御心落ちぬにけり。

住み給ふべき御かた・御覽するに、南の町には、いたづらなる
對どもなどもなし。いさほひ殊に住み満ち給へれば、けしよう
に人繁くもあるべし、中宮のおはします町は、かやうの人も住
みぬべくのだやかなれど、さてさぶらふ人のつらにや聞きなさ
む、とおぼして、すこしうもれたれど、丑寅の町の西の
對、書殿にてあるを、他方へ移してとおぼす。相住みも、忍
びやかに心よく物し給ふ御方なれば、うち語らひてもありなむ、
とおぼしおきつ。うへにも、今ぞかのありし昔の世の・物語聞
えいで給うける。かく御心にこめ給ふ・事ありけるを恨み聞

え給ふ。運わりなしや。世にある人のうへとてや・問はず
がたりは聞え出でむ。斯かるついでに隔てぬこそ・人に・は殊
に思ひ聞ゆ・れ」とて、いとあはれげにおぼし出でたり。人
の上にてもあまた見しに、いと思はぬなかも、女といふものの
心深きをあまた見聞きしかば、更にすきしき心はつかはし
となむ思ひしを、おのづからさるまじきをもあまた見しなかに、
あはれと、ひたぶるにらうたき方は又たくひなくなむ思ひ出で
らる。世にあらましかば、北の町に物する人のなみにはなどか
見ざらまし。人の有様とりくになむありける。かどくしう、
をかしき筋などはおくれたりしかども、あてはかにらうたくも
ありしかな」など宣ふ。紫上も、明石のなみには立ちなら
べ給はざらまし」と宣ふ。なほ北の・おとどをば、めざま
しと心おき給へり。姫君のいとうつくしげにて、何心もなく聞
き給ふがらうたければ、又道理ぞかし・と

三九三

すがくしくも さうさつさと
行くものではない。さうさつと
よろしきわらは若人 相當な童
女や女房などを探させられる。

市女などやうのもの 女行商人
などいつた風な者が、上手に探
し出して侍女を連れて来る。
その人の御子など 玉鬘の種姓
はあらはさなかつた。

人々えり整へ 侍女達を選定し
たり。
物うじして 失望して。がつか
りして。

中將を夕霧をあなたにお頼み
した所が結果がわるくない。故
に同様に玉鬘を世話して下さ

山がつめきて 山賤のやうにし
て育つた事だから、田舎奥い所
が多いでせう。何かにつけて然
るべく疑けてやつて下さい。
姫君の一所 姫がお一人だけで
寂しく思つて居ります所へ、そ
れは仕合です。

つきくしく 私がお世話する
のに似合はしいやうな人も餘り
なくて退屈で居ますのに。

ふるものあつかひ 厄介な古物
扱ひをなさる。玉鬘を老女と推
量して居るのである。
御車三つ 引移りの時の様子。

おとどの君 源氏が玉鬘の居間
に。
昔光源氏など 玉鬘の侍女達
は、河内本に「兵部など」とあ
るの女房の名。

おぼしかへさる。かくいふは九月のことなりけり。渡り給はむ
こと、すがくしくもいかでかはあらむ。よろしきわらは若
人など求めさす。筑紫にては、口惜しからぬ人々も京より散り
ばひ來たるなどを、たよりにつけて呼び集めなどして、さふら
はせしも、俄に惑ひ出で給ひし騒ぎに、皆あぐらかしてければ、
又人もなし。京は、おのづから廣き所なれば、市女などやうの
もの、いとよく求めつづめてく。その人の御子などは知らせ
ざりけり。右近が里の五條に、まづ忍びて渡し奉りて、人々え
り整へ、さうぞくととのへなどして、十月にぞわたり給ふ。
とど、ひんがしの御方に聞え奉り給ふ。源、あはれと思ひし人の
物うじして、はかなき山里に隠れ居にけるを、をさなき人のあ
りしが、年頃も人知れず尋ね侍りしかども、え聞き出でな
む女。になるまで過ぎにけるを、覺えぬ方よりなむ聞きつけ
たる時にだにとて移ろはし侍るなり。母もなくなりけり。中

將を。聞えつけたるに、あしくやはある。同じごと。後見給
へ。山がつめきて生ひ出でたれば、鄙びたる事。多からむ。
さるべく事に觸れて教へ給へ」と、いとこまやかに聞え給ふ。
花散げに斯かる人のおはしけるを、知り聞えざりけるよ。姫君の
一所物し給ふがさうしくしきに、よき事かな」と、おいらかに
宣ふ。源、かの親なりし人は、心なむありがたきまでよかりし。
御心もうしろやすく思ひ聞ゆれば、など宣ふ。花散「つきくしく
後見む人なども事多からで、つれづれに侍るを、嬉しかるべき
事になむ」と。殿の内の人、御むすめとも知
らで、「何人を又尋ね出で給へるならむ。むつかしきふる
ものあつかひかな」といひけり。御車三つばかりして、人の姿
どもなど、右近あれば、田舎びずし。たり。殿よりぞ綾何く
れと奉り給へる。
その夜やがておとどの君渡り給へり。昔光源氏などい

總外を覗き見る爲に、帷子の縫はずにある部分。怖ろしくさへ あまりの美しさに。

心ことにこそ 戀人に逢ひに行く戸口のやうな氣がして。火こそいと 火が薄暗くて戀の世會ひでもするやうな氣がする。河内本にはこの一句中に「こそ」が重複するけれども本の儘の類は 自分を實父らしく言ひなすのである。

おもなの人や 恥かしがりやだね。

げにと覺ゆる 成程夕顔の娘と思はれる目元の深みである。いささかも 源氏は少くも他人親ぶつて。年頃御ゆくへも 年來あなたがどこにゐられるかも知らないので、終始心配して嘆いて居つたのです。

かく年經たる かう長い間對面にしない例は外にありますまい。

などかおぼつかなくは なぜそでなくか 黙つてばかり居られるの。足立たず まだ足も立たぬ頃にも夢現の心ちで。日本紀竟宴歌「かぞゐるはいかに哀と思ふらむ三年になりぬ足立たずして」玉鬘の筑紫下りは四歳の時。

あはれとも今は あなたに同情するの私より外にはありません。心ばへいふかひなくはあらぬ。玉鬘の心構へが萬更ではないと思ひやられる返答振だと源氏は思召す。

目やすく 源氏は玉鬘が無難な女である事を嬉しく思召して。

ふ。名は聞きわたり奉りしかど、年頃のうひ／＼しさに、長い間そんな人を見馴れて居ないのでもしも思ひ聞えざりけるを、ほのかなる大殿油に、御几帳の綻よりはこぼりはつかに見奉る、いとど。怖ろしくさへぞ覺ゆるや。源氏が来渡り給ふかたの戸を右近かい放てば、この戸口に入るべき人は、氣が改まる心ことにこそ」とうち笑ひ給ひて、庇なる御座につい居たまひて、燈火火こそいと懸想びたる心地。すれ。親の顔はゆかしきものとこそ聞け。さもおぼさぬか」とて、几帳すこし押しやり給ふ。わりなく恥かしければ、そばみておはする様體など、いと目やすく見ゆれば、嬉しくて、玉鬘を向いて今すこし光見せむや。あまり心にくし」と宣へば、右近かかけてすこし寄す。玉鬘の方におもなの人や」とすこし。笑ひ給ふ。げにと覺ゆる御まみの恥かしげさなり。いささかも他人と隔てあるさまにも宣ひなさず、いみじく親めきて、玉鬘年頃御ゆくへも知らで、心にかげぬひまなく歎き侍るを、玉鬘かうて見奉るにつけても、夢の心地して、夕顔の事過ぎ

にしかたの事ども取り添へ、忍びかたきに、何とも口が利けないえなむ聞えられざりける」とて、御目押しのごひ給ふ。源氏が誠に悲しうおぼし出でらる。御年の程かぞへ給ひて、源氏が玉鬘の年を親子のなかの、かく年經たるたぐひ。あらしものを、恨めしい前世の宿縁でした契りつらくもありけるかな。今は物うひ初めらしく恥うひしく、若び給ふべき御程にもあらしを、年頃の御物語なども聞えまほしきに、玉鬘などか。おぼつかなくは」と恨み給ふに、玉鬘は聞えむこともなく恥かしければ、玉鬘足立たず沈みそめ侍りにけるのち、何事もあるかなきかになむ」と、ほのかに聞え給ふ聲ぞ、夕顔に似て昔人にいとよく覺えて若びたりける。源氏はほほゑみて、玉鬘沈み給へりけるを、あはれとも今は又誰かは」とて、心ばへいふかひなくはあらぬ御いらへとおぼす。源氏は右近に、宜しく頼んで源氏は歸られたあるべき事宜はせて、わたり給ひぬ。
目やすくものし給ふを、嬉しくおぼして、葉上に玉鬘の噂をされたうへにも語り聞え給ふ。あんな田舎者の中に育つたのだから運さる山がつのなかに年經たれば、どんなに見苦しからうといかにいとほしげなら

兵部卿の宮などの私所を好ましがつて來られる兵部卿宮などの心を攪亂してやりたいたいものだ。兵部卿の宮は源氏の弟で豊兵部卿の宮と申す。

斯かる物のくさはひの斯うした氣を採ませる種の無い時の事です。

いたうもてなしてしがな 玉登をうまく取り扱つて見たいものだ。

なほうちあらぬ 眞面目では通せぬ人々の様子をを見てやら

あやしの心 變な親だ。

まづ人の心 働まむ事を 何より先に人の心をそゝるやうな事をお考へになる。

いと無心に 深い考へも無く妻にしてしまつて残念だ。

戀ひ渡るの歌 夕顔を忘れず戀ひ續けて居る身は昔の儘の我が身であるけれども、實の親で因縁で私方に來たのだらう。かうまで戀しがつてゐる夕顔の引合せであらうか。玉登は筋(毛筋)の枕詞。

成程深く愛した夕顔の形見なのだらうと 榮上は思ふ。

むとあなづりしを、却りて心恥かしきまでなむ見ゆる。斯かるものありといかで人に知らせて、兵部卿の宮などの、この籬の内好ましうし給ふ心、亂りにしがな。好色者どもの、いとうるはしだちてのみ此のわたりに見ゆるも、斯かる、物のくさはひのなき程なり。いたうもてなしてしがな。なほうちあらぬ人の氣色見集めむ」と宣へば、先「あやしの、人の親や。まづ人の心働まむ事を、先おぼすよ。けしからず」と宣ふ。選まことに君をこそ、私今のやうな利簡であつたら今の心ならましかば、玉登のやうにして人を釣つて見るのでしたのにさやうにもてなして見つべかりけれ。いと無心にしなしてしわざぞかし」とて笑ひ給ふに、榮上はおもて赤みておはする、いと若くをかしげなり。硯引寄せ給ひて、手習に、

「戀ひ渡る身はそれなれど玉登いかなる筋を尋ね來つらむあはれ」とやがて獨りごち給へば、榮上げに深くおぼしける人の名殘なめり、と見給ふ。

人かざならずとも ぶつゝか者です。がこんな兄があるからと、眞先に私をお召し下さる筈でした。

御渡りの程 あなたが六條院に引越される折にもお迎へにも参りませんで。

いとまめくしう 夕霧は實の兄弟と思つて居るからである。

親兄弟と 玉登が親兄弟として親しくする源氏夫妻夕霧明石姫君等のお姿容貌を初として。

今ぞ三條も 前に玉登をせめて大貳の北方にと祈つた三條も、この様を見て始めて大貳を輕蔑する氣になつた。

監 肥後の大夫の監。

おぼぞうなるは いい加減にしておくと諸事だらしくなりがちだとあつて、源氏は玉登附の家司を定めたり、然るべき事柄を規定された。

夕霧の君にも、玉登の事選斯かる人を尋ね出でたるを、用意してむつびとぶらへ」と宣ひければ、夕霧が玉登方にこなたにまうで給ひて、夕、人かざならずとも、斯かる者さぶらふと、まづ召寄す。べくなむ侍りける。御渡りの程にも参り仕らざりける事」と、いとまめまめしう聞え給へば、事情を知つて居る人傍痛きまで心知れる人は思ふ。心の限り勅寄を疑した任ひであつたが盡したりし御すまひなりしかど、あさましう田舎びたりしも、六條院の有様たとしへなくぞ思ひくらべらるるや。御しつらひよりはじめ、今めかしうけだかくて、親兄弟とむつび聞え給ふ。御さまかたちよりはじめ、目もあやにおぼゆるに、今ぞ三條も大貳をあなづらはしく思ひける。まして、監がいさざしけはひ、思ひいづるもゆゆしき事限りなし。豊後の介の心ばへを、玉登もありがたきものに君もおぼし知り、右近も思ひいふ。おぼぞうなるは事、も怠りぬべしとて、こなたの家司どもさだめ、あるべき事どもおきてさせ給ふ。豊後の介もなりぬ。年頃田舎び沈

いかでか どうして、我等如きが假初にも参上すべき便宜があるのかと思つて居つた六條院を、朝夕自由に出入りし。

御しつらひの事 玉鬘方の年末の飾付。源氏は玉鬘を他の身分のある婦人達と同等に取扱はれた。山がつの方に田舎者の事だからと侮つて立てた衣裳を玉鬘に贈る序に。

細長 童男や若い婦人の著る細小鞋。表は浮織物で裏は平絹。廣袖で色は一定しない。下に打衣と單とを重ねて著る。唐衣や通を著ない時に着用するのが普通である。誰にも恨みつこの無いやうに分配するがよいでせう。御匣殿に裁縫所で拵へたのも紫上方でし立てたのも。

搦殿 布帛等を光澤を出す爲に砧で打つ場所。

大人びたる上臈 年長の上臈の女房達も伺候して。取り具しつ 取り揃へながら。

つれなくて 何くはぬ顔して、着物で人の容貌を推し量らうといふたくらみですな。そしてそれを御自分の思ひますか。それ鏡にては決められませぬ。ただ花は花田也いませぬ。すは梅のこきかたによれる色も紅梅のこきかたによれる色も異なるへし(河)紅梅はきぬのこやう色はうすぎぬの事也皆如此心得へし。文様を浮かして織つた。蒲萄染 表は蘇芳、裏は花田。又表は紫、裏は赤。今様色 濃い紅梅色。又當時流行の色ともいふ。海賦 波海藻貝類等を取合はせた文様。

みたりし心地、俄に名残なく、いかでか、かりにても立ち出で見るべきよすがなく覺えし大殿の内を、朝夕に出で入りならし、人を従へ、事行ふ身となれるは、いみじき面目と思ひけり。ちとどの君の御心おきての、こまかにありがたうおはします事、いとかたじけなし。

年の暮に御しつらひの事、人々のさうぞくなど、やんごとなき御つらに思しおきてたり。斯かりとも、田舎びたる事(を)奉り給ふついでに、織物どもの、我もくと手を盡したるも、いと多かりけるものどもかな。かたぐに、うらみなくこそ物すべかりけれ。と、うへに聞え給へば、御匣殿に仕らまつれるも、こなたにせさせ給へるも、皆とうでさせ給へり。斯かるすちはた、いとすぐれて、世にな

き色合匂ひを染めつけ給へば、ありがたしと思ひ聞え給ふ。ここかしこの搦殿より參れるものども御覽じくらべて、濃き赤きなど、さまぐをえらせ給ひつ、御衣櫃のころもばこどもに入れさせ給ひて、大人びたる上臈どもさぶらひて、「これは、かれは」と、取りぐしつ入る。うへも見給ひて、いづれも劣りまさるけぢめも見えぬ物どもなめるを、着給はむ人の御かたちに思ひよそへつつ奉れ給へかし。着たるもの人のさまに似ぬは、ひがしくもありかし」と宣へば、ちとど打笑ひ。て、つれなくて、人のかたち推し量らむの御心なめりな。さていづれをとかおぼす」と聞え給へば、それ鏡にてはいかでか」と、さすがに恥ぢらひておはす。紅梅のいと文浮きたる蒲萄染の御小鞋、今様色のいとすぐれたるとは、この御料、櫻の細長につややかなる搔練取り添へては、姫君の御料なり。浅縹の海賦の織物、織りざまなまめきたれど、

山吹 表朽葉、裏紅梅。

内のおとど 玉臺の實父内大

色には 紫上は顔色にはあらは
さないが。

なほそこひあるものさ 矢張奥
底が有るのに。

柳 表白、裏青。夏は卯花と謂
ふ。

ほほあまれ 衣裳があでやか過
ぎて未摘花には似合ふまいと思
ふのである。

思ひ遣りけだかきぞ け高い人
柄と想像されるので。

聽色 禁色でなく誰でも着用し
得る色。薄紅薄紫等。

おなじ日着給ふべき 以上の衣
装を同日に一同着るやうにと廻
文をめぐらしたる。似合つてお
る銘々の様子も御覽にならうと
のお考であつた。
皆返りども その衣裳を受けた
人々からの御返事は何れも立派
なものだ。
今すこしざし離れ 六條院の人
々とは違つて距離もへだたつて
ゐる。祿なども念を入れて風情を
こらすべきだのにつまり一つ
棟のすまひでない(他人所に住
向きの工夫有るべきだの)に
意。打掛給へり 與へられた。衣
裳は黄つたらば肩にかけた例で
あつたからかういつたのである
賜へるは さいは下さらないの
に衣裳を頂いたのは却て恨めし
い。
きて見ればの歌 着て見ると無
情な君が恨めしくなります。こ
の着物は涙で袖を濡らしてお返
し致します。返しは衣の縁
語。御使に 末摘花が使に與へた祿
を源氏が御覽になつて、假にも
自分の妻と名のつく女が、かう
前甚だづらくなかいかと、思つ
て御機嫌がわるいので、思つ
かやうにわりなう。末摘花はか
まりの無闇に古風で人の手前さ
意氣に源氏は持てあましてお
られる。猪口才な人まねしてお

匂ひやかならぬに、いと濃き搔練具して、夏の花散里

りなく赤きに、山吹の花の細長は、かの西の對に奉れ給ふを、

うへは見ぬやうにて思しあはず。内のおとどの、花やかに、あ

な清げとは見えながら、なまめかしう見えたる方のまじらぬに

似たるなめりと、げに推し量らるるを、色にはいだし給はねど、

殿見やり給へるに、ただならず。源氏はこのかたちのよそへは、

人腹だちぬべき事なり。よしとて、物の色は限りあり。人の

かたちは、あくれたるも又なほそこひあるものを」とて、かの

末摘花の御料に、柳の織物の、よしある唐草を亂れ織れ、るも、

いとなまめきたれば、人知れずほほゑまれ給ふ。梅の折枝、蝶

鳥飛びちがひ、唐めいたる白き小桂に、濃さがつややかなるか

さねて、明石の御方に、思ひやりけだかきを、うへはめざまし

と見給ふ。空蟬の尼君に青鈍の織物、いと心はせあるを見つ

け給ひて、御料にある山梔子の御ぞ、聽色なる添へ給ひて、

なじ日・着給ふべき御消息聞えめぐらし給ふ。げに似げづいた

るども見むの御心なりけり。皆御返りどもただならず、御使の

祿・心々なるに、末摘花・ひんがしの院におはすれば、

今すこしざし離れ艶なるべきを、うるはしく物し給ふ人にて、

あるべき事はたがへ給はず、山吹の袿の袖口いたくすすけたる

を、うつばにて打掛け給へり。御文には、いとかうばしきみち

のくに紙の、すこし年経厚さが黄ばみたるに、末摘花、いでや、賜へ

るはなかくにこそ。

きて見ればうらみられけり唐衣返しやりてむ袖を濡らして

御手のすぢ、殊にあうよりにたり。いといたくほほゑみ給ひて、

とみにも打置き給はねば、うへ何事ならむと見おこせ給へり。御

使にかづけたる物を、いとわびしく傍痛しとおぼして、御氣色あ

しければ、すべりまかでぬ。いみじく、おのくはささめき笑

ひけり。かやうにわりなう古めかしう傍痛き所のつき給へる、

納本

玉
臺

尤の事た
ことわりや」とぞあめ^(り)・^(け)る。

四〇六

昭和二十七年五月二十日 印刷
昭和二十七年五月二十五日 發行



校對 源氏物語新釋 卷二

都内定価 六〇〇円
地方定価 六二〇円

著者 吉澤義則

發行者 下中彌三郎

東京都千代田區四番町四

印刷者 塩原康人

東京都千代田區四番町四

株式會社 平凡社

東京都千代田區四番町四
電話九段(33) 四八八二—四番
四八九五—六番

所刷印社立共 〇一の三町保神田神・京東



